

食と農の自立が在所共同体を救う 八紘為宇実現に向けて連帯せよ！

熊野飛鳥むすびの里代表 荒谷 卓



日常を共にする小集団から変えよう！

—— 本来「瑞穂の国」たるべき日本の現状をどう評価していますか。

荒谷 非常に危機的状況だと思います。現在の日本政府は対米従属を維持し、米国の要請に応えようと躍起になっています。グローバリズムを妄信し、グローバル資本主義に追随することが正しいことと信じて疑いません。こうした姿勢に疑問を持ち、平成二十年に自衛隊の職を辞し、明治神宮武道場至誠館館長となり、その後平成三十年十一月に日本で最も古い自然信仰の地域たる熊野の地に「国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里」を設立しました。

かつての日本は、共助共生の国でした。宇宙の屋根

の下に一つの家のような国を作ることが国民の夢でした。国上は人の営みにより地域ごとの風土に姿を変え、風土に根差した文化・社会が形成されていきました。日々の生活から学び、人と人が手を携え、自然に抗うのではなく自然の恩恵を生活の営みに取り込む経験と知恵の歴史が在所共同体を形成したのです。その中心に、天皇が日本のそれぞれの在所共同体をしろしめすことで、私たちの祖先は日本人として生きてきました。いま、日本からそうした文化は失われ、国としての根幹が揺らいでいます。

そうした状況を変えていくことが必要ですが、私たちはすぐ「政治を変える」「教育を変える」と言いがちです。しかし戦後ずっと政治も教育も変えることが

できませんでした。

例えば教育でいえば、日本の子供の教育は本来家と地域共同体で行っていました。日常生活を共にする家族や地域の人達が、日本人としての道徳と社会倫理を子供たちに日常的に教育していったのです。ところが、現代では、朝から晩まで子供を家と共同体から引きはがして学校に隔離し特定の価値観だけを啓蒙します。こうしたワン・ワールド形成に向けた教育システム自体を根本的に変えなくてはなりません。

つまり、子供と日常を共にする家族や地域共同体のような小集団内での教育へと変えていかななくては日本の文化は身につきません。キャッチフレーズばかりで変えられない状態から脱し、自分たちの日常を変えていくことが重要です。

私も二十年前は、いかにグローバリストと戦うかということを考えていたのですが、グローバリストの横暴かつ性急、稚拙なやり方を見るにつけ、いざれグローバリストは自滅すると確信しています。そこで私はグローバリストが自滅した後の社会基盤づくりを注ぐことにしたのです。

さまざまなところで確認されています。こうした情勢で、グローバリストの牙城を瓦解するとか、アメリカのコミットメントを排除するといったことを考えるのは短期的には現実的ではありません。まずは自分たちの伝統文化の主体性を取り戻すことに力を尽くすべきと考えます。日本を立て直す基盤を早急に作っておくべきというのが日本自治集団の活動です。

日本自治集団は、それぞれの地域で価値あるもの、伝統文化、慣習を尊重して実践する各団体が団結することで、建国以来の理念である八紘為宇を理想に掲げながら、日本文化慣習を基盤にした自治社会を実現していくというものです。自治と言っても、現状の日本や地方自治体にそれを期待するのは無理です。まずは自分たちの所属している団体や小さな会社の中において、日本の伝統文化を自主自立の基盤にするように連帯していくというものです。

自治としての農

日本自治集団の中で農業に力点が置かれている理由はどこにあるのでしょうか。

そのためには、各地域に根差す在所共同体を繋ぎ合わせる必要だと思えます。その繋ぎ合わせる機関として、本年三月三十日に「日本自治集団」を創立し、その活動が本格化してきたところです。

——日本自治集団の狙いとはなんでしょうか。

荒谷 戦後日本の状況というのは伝統的な日本文化や価値観を放棄して、アメリカ、あるいはグローバリストの価値観を基本として教育基本法など、あらゆる政治、行政、法律が運営されています。例えば既に識者によって指摘されている通り、GHQのもとで昭和二十六年に公営住宅法が制定され、2DKを基本間取りとした公営アパートが全国各地に建設されました。「封建制の打破」を合言葉に、神棚等を排除し、吹米風の間取りを採用し、大家族ではなく核家族が推奨され、日本文化の破壊が進んだのです。

そういった中で、この状況をどうやって打開するかということを考えてはなりません。戦後もかなり時間を経過し、国際情勢も日本にとってみれば悪い方向に進展しており、簡単には打開しづらい状況にあります。他方で、日本の伝統文化の衰退の兆候がさま

荒谷 自立する、自治をするということは、自らの生命活動を他に依存せず、自立し実行するということですから、根本的な条件として衣食住が自立していなければなりません。着るもの住むところも大事ですが、食事をしないわけにはいけません。特に食が中核にくるものと思っています。食において自立を実現できないのであれば、いくら自立自治を唱えたところで自立は難しいでしょう。

「農」を営む家長制縦家族と農村共同体が日本の原点です。この「農」のあり方は生きるための農であり、ビジネスとしての農業ではありません。農生活自体が自立自治を意味するのです。例えば伊勢神宮がこれまで文化を保ちえたのは自立しているからです。伊勢神宮ではお米も塩もお供物も、お供物を乗せる皿やお米を炊く火までも自給自足の伝統を守っています。あらゆることを自前でやるということによって神社単独で自らの文化価値を守り貫いてこれたのです。これがとても大事なところですので、そういう意味で食の自立を大きな目標として掲げています。

——日本から自治的な意味での食の自立が損なわれ

てしまった原因は何と考えますか。

荒谷 社会の仕組みとして、江戸時代までは食料の自立は完全に達成していたのですが、近代化、産業化に取り組んだ時点でそれを放棄することになってしまいました。近代化のもっとも重要な産業形態が都市部に人間を集中するという必要としますから、それに基づき農業就労者の工業への流出が始まりました。さらにここ最近では、モノを産み出さないITや金融業界が強くなり、おカネを持っている消費大国や一部の富裕層が豊かになり、生産国や生産者は貧困になるような社会となりました。その結果、日本は生産大国ではなく消費大国を目指すようになり、食の自立基盤を国の政策で放棄してきました。

これによって、農業に対する国家としての保護がほとんどなくなってきました。アメリカやフランスなど通常の国々は、農業生産者をかなり手厚く保護しているにもかかわらず、わが国は少ない。また、競争に対する関税などの保護措置がほとんどなく、価格競争に耐えきれない状況です。これは、農としての文化価値を完全に放棄したのみでなく、農業としての産業基

盤も自ら破壊しています。こんな状況では、生きる為の農は完全に不可能です。

文化的に見ても日本にとって農というのは神勅からなる意味合いがあつて、コミュニティにおいても社会観とか道徳観とか、最も国家の根幹となる価値観が形成される基盤となっていました。農は自然への畏怖の心と、田や水路を整えてくれた祖先への感謝の心を養う場となり、「神ながらの道」の実践の場となります。これを特に戦後になって無視して、日本人に内在してきた価値観がわからなくなりました。その結果、農の価値もわからずおカネにもならない状況になってしまいました。

フランスやアメリカは先進国にもかかわらず農業を保護しているのに、日本は保護しなくなつてしまったのは何が原因でしょうか。

荒谷 これは占領政策の中で、そうせざるを得ない方向に向けられたのではないかと印象が強いです。占領後は、カロリーが高い方がいいとして、パン、牛乳が給食として配給されました。日本人は乳製品をうまく消化しづらい性質があるにもかかわらずです。そこまで強

要して食文化を破壊した。そして、食料自給率もわがわがカロリーベースで計算し、日本は食料自給率も低く、貿易に頼らないと生きていけないというフレーズを強調するようにになり、国民が食糧自給を諦めるようになっています。最近では、やたらと増えた料理番組で輸入食品から成るレシピを叩き込み、国産の野菜等は流通ルートに乗せるのさえ難しくなっています。

グローバルスタンダードから八紘為宇へ

瑞穂の国を守るために必要な発想とは何ですか。

荒谷 終戦後の七年間に及ぶ米軍占領下に、日本はグ

ローバリーゼーションの側の下劣と化してしまっていた。自分たちが何を守ろうとしていたのか、何と戦っていたのかを完全に忘れ、日本人が命をかけて守ろうとしていたものを日本人自らが破壊してしまいました。

私は秋田県出身ですが、生まれ故郷の田舎にもショッピングモールが建ち、商店街は跡形もなく消え去り、日本全国どこに行っても同じようなチェーン店が並んでいます。それが、地方の過疎を促進したのです。日本には独自のローカルスタンダードがあります。グローバルスタンダードからローカルスタンダードへ、個人主義から家族主義へ、自由主義利己主義か

ら共存共栄利他主義へ価値観を転換しなければなりません。そうすることで自己の存在を実感できる社会づくりを行い、世のため人のために働くことに幸福を感じる社会づくりに努める必要があるのです。

問題の根本は、特定の思想・価値観の下に全世界を管理しようとするグローバル化にあります。わが国は、グローバル化の風潮に追従し経済活動のみに専念した結果、自国の歴史価値観、伝統文化、そして防衛機能や自立した自治までも失い、国として崩壊の途を辿っています。

アメリカの政治思想は、市場を中心とした個人の富の獲得のための自由競争に世界秩序をゆだねるという考え方です。この考えのもとでは、人々は競争するばかりで協力することができません。そして富の競争に勝った少数の人は、多数の貧困層の犠牲の上に世界規模の権力を手中にしています。今まさに、国民一人一人が、他に頼らず自らの力により、日本人として生きることを考え行動しなければなりません。

その土地の自然風土、その土地のエネルギーである産土神、その土地に生きた祖先それらすべてと一体と

なって生きるのが在所共同体です。この在所共同体が健全に存在してこそその国家なのです。

自分の生きる在所共同体を早急に形成しましょう。古より受け継いできた地域の歴史文化を継承することで在所共同体の自立自存力を高め、日本という国の屋台骨を形成するのです。そして、それらの在所共同体の一つ一つが、互いの文化を尊重し繋ぎ合わせ、共に助け合う生活の中で、わが国の自治は再生されます。神武建国の理想『八紘を掩いて宇と為むこと亦よからずや』という言葉には、真の意味で平和な社会とは、個人主義者の契約社会でもなければ、マネーを稼いだパワーエリートによる統制管理社会でもなく、人々の家族的団結によらねば成しえないとの日本民族の信念が込められています。

世界的大転換点の今だからこそ、日本民族の理想に向かい一人でも多くに人が力を合わせて協働できれば、必ずやよい社会、よい日本、よい世界が実現すると信じています。